

太宰治

親友交歡



一冊堂青空文庫

親友交歓

太宰治

昭和二十一年の九月のはじめに、私は、或る男の訪問を受けた。

この事件は、ほとんど全く、ロマンチックではないし、また、いつこうに、ジャナリスチックでも無いのであるが、しかし、私の胸に於いて、私の死ぬるまで消し難い痕跡を残すのではあるまいか、と思われる、そのような妙に、やりきれない事件なのである。

事件。

しかし、やっぱり、事件といつては大袈裟かも知れない。私は或る男と二人で酒を飲み、別段、喧嘩も何も無く、そうして少くとも外見に於いては和氣藹々裡に別れたというだけの出来事なのである。それでも、私にはどうしても、ゆるがせに出来ぬ重大事のような気がしてならぬのである。

とにかくそれは、見事な男であつた。あつぱれな奴であつた。好いところが一つもみじんも無かつた。

私は昨年罹災^{りさい}して、この津軽の生家に避難して来て、ほとんど毎日、神妙らしく奥の

部屋に閉じこもり、時たまこの地方の何々文化会とか、何々同志会とかいうところから講演しに來い、または、座談会に出席せよなどと言われる事があつても、「他にもっと適当な講師がた^はくさんいる筈^{はず}です」と答えて斷り、こつそりひとりで寢酒など飲んで寢る、というやや贗^{にせいん}隱者のあけくれにも似たる生活をしているのだけれども、それ以前の十五年間の東京生活に於いては、最下等の居酒屋に出入りして最下等の酒を飲み、所謂最下等の人物たちと語り合つていたものであつて、たいていの無頼漢には驚かなくなつてゐるのである。しかし、あの男には呆^{あき}れた。とにかく、ずば抜けていやがつた。

九月のはじめ、私は昼食をすませて、母屋^{おもや}の常居^{じょうい}という部屋で、ひとりぼんやり煙草を吸つていたら、野良着姿の大きな親爺^{おやじ}が玄關のたたきにのつそり立つて、

「やあ」と言つた。

それがすなわち、問題の「親友」であつたのである。

(私はこの手記に於いて、ひとりの農夫の姿を描き、かれの嫌惡すべき性格を世人に披^{ひら}露^うし、以て階級闘争に於ける所謂「反動勢力」に応援せんとする意図などは、全く無いのだという事を、ばからしいけど、念のために言い添えて置きたい。それはこの手記の

おしまいまでお読みになったら、たいていの読者には自明の事で、こんな断り書きは興覚めに違いないのであるが、ちかごろ甚だ頭の悪い、無感覚の者が、しきりに何やら古くさい事を言つて騒ぎ立て、とんでもない結論を投げてよこしたりするので、その頭の古くて悪い（いや、かえつて利口なのかも知れないが）その人たちのために一言、言わでもこの説明を附け加えさせていただく次第なのだ。どだい、この手記にあらわれる彼は、百姓のような姿をしているけれども、決してあの「イデオロギスト」たちの敬愛的たる農夫では無い。彼は実に複雑な男であつた。とにかく私は、あんな男は、はじめて見た。不可解といつてもいいくらいであつた。私はそこに、人間の新しいタイプをさえ予感した。善い悪いという道徳的な審判を私はそれに対して試みようとしているのではなく、そのような新しいタイプの予感を、読者に提供し得たならば、それで私は満足なのである）

彼は私と小学校時代の同級生であつたところの平田だという。

「忘れたか」と言つて、白い歯を出して笑っている。その顔には、幽かに見覚えがあつた。

「知っている。あがらないか」私はその日、彼に対してたしかに軽薄な社交家であつ

た。

彼は、藁草履わらぞうりを脱いで、常居にあがった。

「久しぶりだなあ」と彼は大声で言う。「何年振りだ？ いや、何十年振りだ？ おい、二十何年振りだよ。お前がこっちに來ているという事は、前から聞いていたが、なかなか俺も畑仕事がいそがしくてな、遊びに來れないでいたのだよ。お前もなかなかの酒飲みになったそうじゃないか。うわっはっはっは」

私は苦笑し、お茶を注いで出した。

「お前は俺と喧嘩した事を忘れたか？ しよっちゅう喧嘩をしたものだ」

「そうだったかな」

「そうだったかなじゃない。これ見ろ、この手の甲に傷がある。これはお前にひつかった傷だ」

私はその差し伸べられた手の甲を熟視したが、それらしい傷跡はどこにも無かった。

「お前の左の向う脛すねにも、たしかに傷がある筈だ。あるだろう？ たしかにある筈だよ。それは俺がお前に石をぶつつけた時の傷だ。いや、よくお前とは喧嘩をしたものだ」

しかし、私の左の向う脛にも、また、右の向う脛にも、そんな傷は一つも無いのである。私はただあいまいに微笑して、かれの話を傾聴していた。

「ところで、お前に一つ相談があるんだがな。クラス会だ。どうだ、いやか。大いに飲もうじゃないか。出席者が十人として、酒を二斗、これは俺が集める」

「それは悪くないけど、二斗はすこし多くないか」

「いや、多くない。ひとりに二升無くては面白くない」

「しかし、二斗なんてお酒が集まるか？」

「集まらない、かも知れん。わからないが、やってみる。心配するな。しかし、いくら田舎だってこの頃は酒も安くはないんだから、お前にそこは頼む」

私は心得顔で立ち上り、奥の部屋へ行って大きい紙幣を五枚持つて来て、

「それじゃ、さきにこれだけあずかつて置いてくれ。あとはまた、あとで」

「待ってくれ」とその紙幣を私に押し戻し、「それは違う。きょうは俺は金をもらいに来たのではない。ただ相談に来たのだ。お前の意見を聞きに来たのだ。どうせそれあ、お前からは、千円くらいは出してもらわないといけない事になるだろうが、しかし、きょうは相談かたがた、昔の親友の顔を見たくて来たのだ。まあ、いいから、俺にまか

せて、そんな金なんか、ひっこめてくれ」

「そうか」私は、紙幣を上衣のポケットに収めた。

「酒は無いのか」と突然かれは言った。

私はさすがに、かれの顔を見直した。かれも、一瞬、工合いの悪そうな、まぶしそうな顔をしたが、しかし、つつぱった。

「お前のところには、いつでも二升や三升は、あると聞いているんだ。飲ませろ。かかは、いないのか。かかのお酌で一ぱい飲ませろ」

私は立ち上り、

「よし。じゃ、こっちへ来い」

つまらない思いであった。

私は彼を奥の書斎に案内した。

「散らかっているぜ」

「いや、かまわない。文学者の部屋というのは、みんなこんなものだ。俺も東京にいた頃、いろんな文学者と付き合いがあったからな」

しかし、私にはとてもそれは信じられなかった。

「やっぱり、でも、いい部屋だな。さすがに、立派な普請だ。庭の眺めもいい。柊があらな。柊のいわれを知っているか」

「知らない」

「知らないのか？」と得意になり、「そのいわれは、大にして世界的、小にして家庭、またお前たちの書く材料になる」

さっぱり言葉が、意味をなして居らぬ。足りないのではないか、とさえ思われた。しかし、そうではなかった。なかなか、ずるくて達者な一面も、あとで見せてくれたのである。

「なんだろうね、そのいわれは」

にやりと笑って、

「こんど教える。柊のいわれ」ともつたい振る。

私は押入れから、半分ほどはいつているウイスキーの角瓶を持ち出し、

「ウイスキーだけど、かまわないか」

「いいとも。かかがいないか。酌をさせろよ」

永い間、東京に住み、いろんな客を迎えたけれども、私に対してこんな事を言った客

は、ひとりも無かった。

「女房は、いない」と私は嘘うそを言った。

「そう言わずに」と彼は、私の言う事などでんで問題にせず、「ここへ呼んで来て、お酌をさせろよ。お前のかかのお酌で一ぱい飲んでみたくてやって来たのだ」

都会の女、あか抜けて愛嬌あいぎょうのいい女、そんなのを期待して来たのなら、彼にもお気の毒だし、女房もみじめだと思った。女房は、都会の女はあるが、頗すいる野暮ぶたい不器量の、そうして何のおあいそも無い女である。私は女房を出すのは気が重かった。

「いいじゃないか。女房のお酌だと、かえって酒がまづくなるよ。このウイスキーは」と言いながら机の上の茶呑茶碗ちやのみちやわんにウイスキーを注ぎ、「昔なら三流品なんだけど、でも、メチルではないから」

彼はぐつと一息に飲みほし、それからちよつちよつと舌打ちをして、

「まむし焼酎しょうちゅうに似ている」と言った。

私はさらにまた注いでやりながら、

「でも、あんまりぐいぐいやると、あとで一時に酔いが出て来て、苦しくなるよ」

「へえ？ おかど違いでしょう。俺は東京でサントリイを二本あけた事だつてあるの

だ。このウiskiは、そうだな、六〇パーセントくらいかな？ まあ、普通だ。たいして強くない」と言つて、またぐいと飲みほす。なんの風情ふぜいも無い。

そうしてこんどは、彼が私に注いでくれて、それからまた彼自身の茶碗にもなみなみと一ぱい注いで、

「もう無い」と言つた。

「ああ、そう」と私は上品なる社交家の如く、心得顔に気軽そうに立ち、またもや押入れからウiskiを一本取り出し、栓をあける。

彼は平然と首肯して、また飲む。

さすがに私も、少しいまいましくなつて来た。私には幼少の頃から浪費の悪癖があり、ものを惜しむという感覚は、（決して自慢にならぬ事だが）普通の人に較べてやや鈍いように思っている。けれども、そのウiskiは、謂いわば私の秘蔵のものであったのである。昔なら三流品でも、しかし、いまではたしかに一流品に違いなかつたのである。値段も大いに高いけれども、しかし、それよりも、之これを求める手蔓てづるが、たいへんだったのである。お金さえ出せば買えるというものでは無かつたのである。私はこのウiskiを、かなり前にやつと一ダアスゆずつてもらい、そのために破産したけれども

後悔はせず、ちびちび^な嘗めて楽しみ、お酒の好きな作家の井伏^{いふせ}さんなんかやって来たら飲んでもらおうとかなり大事にしていたのである。しかし、だんだん無くなって、その時には、押入れに、二本半しか残っていなかったのである。

飲ませろ、と言われた時には、あいにく日本酒も何も無かったので、その残り少なの秘蔵のウiskiを出したのであるが、しかし、こんなにがぶがぶ鯨飲されるとは思っていなかった。甚だケチ臭い愚痴を言うようだが、（いや、はつきり言おう。私はこのウiskiに関して、ケチである。惜しいのである）まるで何か当然の事のように、大威張りでぐいぐい飲まれては、さすがに、いまましい気が起らざるを得なかったのである。

それにまた、彼の談話たるや、すこしも私の共感をそそってはくれないのである。それは何も私が教養ある上品な人物で相手は無学な田舎親爺だからというわけではなかった。そんな事は、絶対に無い。私は全然無教養な淫売婦^{いんばいふ}と、「人生の真実」とでもいったような事を大まじめで語り合った経験さえ持っている。無学な老職人に意見せられ涙を流した事だってある。私は世に言う「学問」を懷疑さえしている。彼の談話が、少しも私に快くなかったのは、たしかに他の理由からである。それは何か。私はそれを

ここで、二、三語を用いて断定するよりも、彼のその日のさまざまの言動をそのまま活写し、以て読者の判断にゆだねたほうが、作者として所謂健康な手段のように思われる。

彼は「俺の東京時代は」という事を、さいしょから、しきりに言っていたが、酔うにしたがつて、いよいよ頻繁にそれが連発せられて来た。

「お前も、しかし、東京では女でしくじったが」と大声で言つて、にやりと笑い、「俺だって、実は、東京時代に、あぶないところまでいった事があるんだ。もう少しで、お前と同じような大しくじりをするところまでいったんだ。本当だよ。じつさい、そこまでいったんだ。しかし、俺は逃げたよ。うん、逃げた。それでも、女というものは、いったん思い込んだ男を忘れかねると見えるな。うわっはっは。いまでも手紙を寄こすのだよ。うふふ。こないだも、餅を送つてよこした。女は、馬鹿なものだよ、まったく。女に惚^ほれられようとしたら、顔でも駄目だ、金でも駄目だ、氣持だよ、心だよ。じつさい俺も東京時代は、あばれたものだ。考えてみると、あの頃は無論お前も東京にいて、芸者を泣かせたりなんかして遊んでいた筈だが、いちども俺と逢わなかったのは不思議だな。お前は、いったいあの頃は、おもにどの方面で遊んでいたのだ」

あの頃とは、私には、どの頃かわからない。それに私は東京に於いて、彼の推量の如くそんな、芸者を泣かせたりして遊んだ覚えは一度だつて無い。おもに屋台のヤキトリ屋で、泡盛や焼酎を飲み、管くだを巻いていたのである。私は東京に於いて、彼の所謂「女で大しくじり」をして、それも一度や二度でない、たび重なる大しくじりばかりして、親兄弟の肩身をせまくさせたけれども、しかし、せめて、これだけは言えると思う、「ただ金のあるにまかせて、色男ぶつて、芸者を泣かせて、やにさがつていたのではない！」みじめなプロテストではあるが、これをさえ私は未だに信じてもらえない立場にいるらしいのを、彼の言葉に依つて知らされ、うんざりした。

しかし、その不愉快は、あながちこの男に依つて、はじめて嘗めさせられたものではなく、東京の文壇の批評家というもの、その他いろいろさまざま、または、友人という形になっている人物に依つてさえも嘗めさせられている苦汁であるから、それはもう笑つて聞き流す事も出来るようになっていたのであるが、もう一つ、この百姓姿の男が、何かそれを私の大いなる弱味の如く考えているらしく、それに附け込むという気配が感ぜられて、そのような彼の心情がどうにも、あさましく、つまらないものと思われた。

しかし、その日は、私は極めて軽薄なる社交家であった。毅然^{きぜん}たるところが一つも無かった。なんといったって、私は、ほとんど無一物の戦災者であって、妻子を引き連れ、さほど豊かでもないこの町に無理矢理割り込ませてもらって、以てあやうく露命をつなぐを得ているという身の上に違いないのであるから、この町の昔からの住民に対しては、いきおい、軽薄なる社交家たらざるを得なかった。

私は母屋へ行って水菓子をもらって来て彼にすすめ、

「たべないか。くだものを食べると、酔いがさめて、また大いに飲めるようになるよ」
私は彼がこの調子で、ぐいぐいウイスキーを飲み、いまに大酔いを発し、乱暴を働かないまでも、前後不覚になつては、始末に困ると思い、少し彼を落ちつかせる目的を以て、梨の皮などをむいてすすめたのである。

しかし、彼は酔いを覚ます事は好まない様子で、その水菓子には眼もくれず、ウイスキーの茶吞茶碗にだけ手をかける。

「俺は政治はきらいだ」と突如、話題は政治に飛ぶ。「われわれ百姓は、政治なんて何も知らなくていいのだ。実際の俺たちの暮しに、少しでも得になる事をしてくれたら、そっちへつく。それでいいだろう。現物を眼の前に持つて来て、俺たちの手に握らせた

ら、そっちへつく。それでいいわけではないか。われわれ百姓には野心は無いんだ。受けた恩は、きつと、それだけかえしてやる。それはもう、われわれ百姓の正直なところだ。進歩党も社会党も、どうだっていいんだ。われわれ百姓は田を作り、畑を耕やしていたら、それでいいのだ」

私は、はじめ、なぜ彼が突如としてこんな妙な事を言い出したのか、わけがわからなかった。けれども、次の言葉で、真意が判明し苦笑した。

「しかし、こないだの選挙では、お前も兄貴のために運動したろう」

「いや、何も、ひとつも、しなかった。この部屋で毎日、自分の仕事をしていた」

「嘘だ。いかにお前が文学者で、政治家でないとしても、そこは人情だ。兄貴のために、大いにやったに違いない。俺はな、学問も何も無い百姓だが、しかし、人情というものを持つている。俺は、政治はきらいだ。野心も何も無い。社会党だの進歩党だのと言ったって、おそれるところは無いと思っっているのだが、しかし、人情は持つている。

俺はな、お前の兄貴とは、別に近づきでも何でも無いが、しかし、少くともお前は、俺と同級生でもあり、親友だろう。ここが人情だ。俺は誰にたのまれなくても、お前の兄貴に一票いれた。われわれ百姓は、政治も何も知らなくていい。この、人情一つだけを

忘れなければ、それでいいと思うが、どうだ」

その一票が、ウイスキーの権利という事になるのだろうか。あまりにも見え透いて、私はいよいよ興覚めるばかりであった。

しかし、彼だって、なかなか、単純な男ではない。敏感に、ふっと何か察するらしい。

「俺は、しかし何も、お前の兄貴の家来になりたがっている、というわけじゃないんだよ。そんなに、この俺を見下げ果ててもらっては困るよ。お前の家だって、先祖をただせば油売りだったんだ。知っているか。俺は、俺の家の婆から聞いた。油一合買ってくれた人には、飴玉一つ景品としてやったんだ。それが当った。また川向うの斎藤だつて、いまこそあんな大地主で威張りかえっているけれども、三代前には、川に流れてい^{しほ}る柴を拾い、それを削^くって串を作り、川からとった雑魚^{ざこ}をその串にさして焼いて、一文とか二文とかで売ってもうけたものなんだ。また、大池さんの家なんか、路傍^{みちばた}に桶^{おけ}を並べて路行く人に小便をさせて、その小便が桶一ぱいになると、それを百姓たちに売ってもうけたのが、いまの財産のはじまりだ。金持ちなんて、もとをただせば、皆こんなものだ。俺の一族は、いいか、この地方では一ばん古い家柄という事になっているんだ。

何でも、祖先は、京都の人で」と言いかけて、さすがに、てれくさそうに、ふふんと笑い、「婆の話だから、あてにはならんが、とにかくちゃんとした系図は在るのだ」

私はまじめに、

「それでは、やはり、公卿くけの出かも知れない」と言つて、彼の虚栄心を満足させてやつた。

「うん、まあ、それは、はっきりはわからないが、たいてい、その程度のところなのだ。俺だけはこのな、汚い身なりで毎日、田畑に出ているが、しかし、俺の兄は、お前も知っているだろう、大学を出た。大学の野球の選手で新聞にしょっちゅう名前が出ていたではないか。弟もいま、大学へはいっている。俺は、感ずるところがあつて、百姓になつたが、しかし、兄でも弟でも、いまではこの俺に頭があがらん。なにせ、東京は食糧が無いんで、兄は大学を出て課長をしているが、いつも俺に米を送つてよこせという手紙だ。しかし、送るのがたいへんでな。兄が自分で取りに来たら、そうしたら、俺はいくらでも背負わさせてやるんだが、やつぱり東京の役所の課長ともなれば、米を背負いに来るわけにもいかんらしいな。お前だつて、いま何か不自由なものがあつたら、いつでも俺の家へ来い。俺はな、お前に、ただで酒を飲ませてもらおうとは思つてない

よ。百姓というものは、正直なもんだ。受けた恩は、かならず、きつちりとそれだけ返す。いや、もうお前のお酌では、飲まん！ かかを呼んで来い。かかのお酌でなければ、俺は飲まん！」私は一種奇妙な心持がした。別に私は、そんなに彼に飲ませたいとは思ってもいないのに。「もう俺は飲まんよ。かかを連れて来い！ お前が連れて来なければ、俺が行って引っぱって来る。かかは、どこにいるんだ。寢室か？ 寢る部屋か？俺は天下の百姓だ。平田一族を知らないかあ」次第に酔って、くだらなく騒ぎ、よろよろと立ち上る。

私は笑いながら、それをなだめて坐らせ、

「よし、そんなら連れて来る。つまらねえ女だよ。いいか」

と言って女房と子供のいる部屋へ行き、

「おい、昔の小学校時代の親友が遊びに見えているから、ちよつと挨拶に出てくれ」

と、もっともらしい顔をして言いつけた。

私は、やはり、自分の客人を女房にあなどらせたくなかった。自分のところへ来た客人が、それはどんな種類の客人でも、家の者たちにあなどられている気配が少しでも見えると、私は、つらくてかなわないのだ。

女房は小さいほうの子供を抱いて書齋にはいつて来た。

「このかたは、僕の小学校時代の親友で、平田さんというのだ。小学校時代には、しょっちゅう喧嘩して、このかたの右だか左だかの手の甲に僕のひつ搔いた傷跡がまだ残っていてね、だからきようはその復讐ふしゅうにおいでなすったというわけだ」

「まあ、こわい」と女房は笑って言って、「どうぞよろしく」とていねいにお辞儀をした。

私たち夫婦のこんな軽薄きわまる社交的な儀礼も、彼にとってまんざらでもなかったらしく、得意満面で、

「やあ、固苦しい挨拶はごめんだ。奥さん、まあ、こっちへずっと寄ってお酌をしてください」彼もまた、抜けめのない社交家であった。蔭では、かかと呼び、めんと向えば、奥さん、などと言っている。

女房のお酌で、ぐいと飲み、

「奥さん。いまも、修治（私の幼名）に言っていたのだが、何か不自由なものがあつたら、俺の家へ来なさい。なんでもある。芋でも野菜でも米でも、卵でも、鶏でも。馬肉はどうです、たべますか、俺は馬の皮をはぐのは名人なんだ、たべるなら、取りに來な

さい、馬の脚一本背負わせてかえします。雉^きはどうです、山鳥のほうがおいしいかな？俺は鉄砲撃ちなんだ。鉄砲撃ちの平田といえ、このへんでは、知らない者は無いんだ。お好みに応じて何でも撃つてあげますよ。鴨^{かも}はどうです。鴨なら、あすの朝でも田圃^ぼへ出て十羽くらいすぐ落して見せる。朝めし前に、五十八羽撃ち落した事さえあるんだ。嘘だと思ふなら、橋のそばの鍛冶屋^{かじや}の笠井三郎のところへ行つて聞いて見ろ。あの男は、俺の事なら何でも知っている。鉄砲撃ちの平田といえ、この地方の若い者は、絶対服従だ。そう、あしたの晩、おい文学者、俺と一緒に八幡様の宵宮^{よみや}に行つてみないか。俺が誘いに来る。若い者たちの大喧嘩があるかも知れないのだ。どうもなあ、不穏な形勢なんだ。そこへ俺が飛び込んで行つて、待った！ と言うのだ。ちょうど幡随^{ばんずい}院^{いん}の長兵衛というところだ。俺はもう命も何も惜しくねえ。俺が死んだつて、俺には財産があるんだからな、かかや子供は困る事がない。おい、文学者。あしたの晩は、ぜひ、一緒に行こうじゃないか。俺の偉いところを見せてやる。毎日、こんな奥の部屋でまごまごしていたつて、いい文学は出来ない。大いに経験をひろくしなければいけない。いったい、お前は、どういふものを書いているのだ。うふふ。芸者小説か。お前は苦勞を知らないから駄目だ。俺はもう、かかを三度とりかえた。あとのかかほど、可愛

いもんだ。お前は、どうだ。お前だって、二人か！ 三人か！ 奥さん、どうです、修治は、あなたを可愛がるか？ 俺は、それでも東京で暮した事のある男でね」

甚だ、まずい事になって来た。私は女房に、母屋へ行つて何か酒のさかなをもらつて来なさい、と言いつけ、席をはずさせた。

彼は悠然と腰から煙草入れを取り出し、そうして、その煙草入れに附属した巾著きんちやくの中から、ホクチのはいつている小箱だの火打石だのを出し、カチカチやつて煙管きせるに火をつけようとするのだが、なかなかつかない。

「煙草は、ここにたくさんあるからこれを吸い給え。煙管は、めんどくさいだろう」と私が言うと、彼は私のほうを見て、にやりと笑い、煙草入れをしまい込み、いかにも自慢そうに、

「われわれ百姓は、こんなものを持つているのだよ。お前たちは馬鹿にするだろうが、しかし、便利なものだ。雨の降る中でも、火打石は、カチカチとやりさえすれば火が出る。こんど俺は東京へ行く時、これを持参して銀座のまんなかで、カチカチとやつてやろうと思うんだ。お前ももうすぐ東京へ帰るのだろう？ 遊びに行くよ。お前の家は、東京のどこにあるのだ」

「罹災してね、どこへ行ったらいいか、まだきまつていないよ」

「そうか、罹災したのか。はじめて聞いた。それじゃ、いろいろ特配をもらつたろう。こないだ罹災者に毛布の配給があつたようだが、俺にくれ」

私はまごついた。彼の真意を解するに苦しんだ。しかし、彼は、まんざら冗談でも無いらしく、しつこくそれを言う。

「くれよ。俺は、ジャンパーを作るのだ。わりにいい毛布らしいじゃないか。くれよ。どこにあるのだ。俺は帰りに持つて行くぞ。これは、俺の流儀でな。ほしいものがあつたら、これ持つて行く！　と言って、もらつてしまふ。そのかわり、お前が俺のところへ来たら、お前もそうするとよい。俺は平気だ。何を持つて行つたつて、かまわないよ。俺は、そんな流儀の男だ。礼儀だの何だの、めんどくさい事はきらいなのだ。いか、毛布は、もらつて行くぞ」

そのたった一枚の毛布は、女房が宝物のように大事にしているものなのだ。所謂「立派な」家にいま住んでいるから、私たちには何でもあり余っているように、彼に思われているのだろうか。私たちは、不相応の大きい貝殻の中に住んでいるヤドカリのようなもので、すぼりと貝殻から抜け出ると、丸裸のあわれな虫で、夫婦と二人の子供は、特

配の毛布と蚊帳^{かや}をかかえて、うろうろ戸外を這^はいまわらなければならなくなるのだ。家の無い家族のみじめさは、田舎の家や田畠を持つている人たちにはわかるまい。このたびの戦争で家を失った人たちの大半は、（きつとそうだと思ふのだが）いつか一たびは一家心中という手段を脳裡^{のうり}に浮べたに違いない。

「毛布は、よせよ」

「ケチだなあ、お前は」

とさらにしつこく、ねばろうとしていた時に、女房はお膳を運んで来た。

「やあ、奥さん」と矛先は、そちらに転じて、「手数をかけるなあ。食うものなんか何も要りませんから、さあここへ来てお酌をしてください。修治のお酌では、もう飲む気がしない。ケチくさくて、いけない。殴ってやろうか。奥さん、俺はね、東京時代にね、ずいぶん喧嘩が強かったですよ。柔道もね、ちよつと、やりました。いまだって、こんな、修治みたいなのは一ひねりですよ。いつでもね、修治があなたに威張ったら、俺に知らせなさい。思いきりぶん殴ってやりますから。どうです、奥さん、東京にいた時も、こつちへ来てからも、修治に対して俺ほどこんな無遠慮に親しく口をきける男は無かつたろう。何せ昔の喧嘩友達だから、修治も俺には、気取る事が出来やしない」

ここに於いて、彼の無遠慮も、あきらかに意識的な努力であつた事を知るに及んで、ますます私は味気無い思いを深くした。ウイスキーをおごらせて大あばれにあばれて来た、と馬鹿な自慢話の種にするつもりなのであるうか。

私は、ふと、木村重成しげなりと茶坊主の話の思い出した。それからまた神崎与五郎かんざきと馬子の話も思い出した。韓信かんしんの股くぐりさえ思い出した。元来、私は、木村氏でも神崎氏でも、また韓信の場合にしても、その忍耐心に対して感心するよりは、あのひとたちが、それぞれの無頼漢に対して抱いていた無言の底知れぬ軽蔑感けいべつを考えて、かえってイヤミなキザなものしか感じる事が出来なかつたのである。よく居酒屋の口論などで、ひとりが悲憤してたけり立っているのに、ひとりは何れも余裕ありげに、にやにやして、あたりの人に、「こまつた酒乱さ」と言わぬばかりの色目をつかい、そうして、その激昂げつこうの相手に対し、「いや、わるかつたよ、あやまるよ、お辞儀をします」など言つてるのを見かけることがあるけれども、あれは、まことにイヤミなものである。卑怯ひきょうだと思う。あんな態度に出られたら、悲憤の男はさらに物狂おしくあばれ廻らざるを得ないだろうと思われる。木村氏や神崎氏、または韓信などは、さすがにそんな観衆に対していやらしい色眼をつかい、「わるかつたよ、あやまるよ」の露骨なスタンドプレイを演ずる事なく、

堂々と、それこそ誠意おもてにあらわれる態の詫び方をしたに違いないが、しかし、それにしても、之等の美談は、私のモラルと反撥する。私は、そこに忍耐心というものは感ぜられない。忍耐とは、そんな一時的な、ドラマチックなものでは無いような気がする。アトラスの忍耐、プロメテの忍苦、そのようなかなり永続的な姿であらわされる徳のように思われる。しかも前記三氏の場合、その三偉人はおのおの、その時、奇妙に高い優越感を抱いていたらしい節がほの見えて、あれでは茶坊主でも、馬子でも、ぶん殴りたくなるのも、もつともだと、かえってそれらの無頼漢に同情の心をさえ寄せていたのである。殊に神崎氏の馬子など、念入りに詫び証文まで取ってみたが、いっこうに浮かぬ気持で、それから四、五日いよいよ荒んでやけ酒をくらったであろうと思われる。そのように私は元来、あの美談の偉人の心懷には少しも感服せず、かえって無頼漢どもに対して大いなる同情と共感を抱いていたつもりであったが、しかし、いま眼前に、この珍客を迎え、従来の私の木村神崎韓信観に、重大なる訂正をほどこさざるを得なくなつて来たようであつた。

卑怯だつて何だつてかまわない。荒れ馬は避くべし、というモラルに傾きかけて来たのである。忍耐だの何だの、そんな美徳について思いをひそめている余裕は無い。私は

断言する。木村神崎韓信は、たしかにあのやけくその無頼の徒より弱かったのだ、圧倒せられていたのだ。勝目が無かったのだ。キリストだつて、時われに利あらずと見るや、「かくして主は、のがれ去り給えり」という事になっているではないか。

のがれ去るより他は無い。いまここで、この親友を怒らせ、戸障子をこわすような活劇を演じたら、これは私の家では無し、甚だ穏やかでない事になる。そうでなくても、子供が障子を破り、カーテンを引きちぎり、壁に落書などして、私はいつも冷や冷やしているのだ。ここは何としても、この親友の御機嫌を損じないように努めなければならぬ。あの三氏の伝説は、あれは修身教科書などで、「忍耐」だの、「大勇と小勇」だのという題でもつてあつかわれているから、われら求道の人士をこのように深く惑わす事になるのである。私がもし、あの話を修身の教科書に採用するとしたなら、題を「孤独」とするであろう。

私は、いまこそあの三氏の、あの時の孤独感を知った、と思った。

彼の気焰きえんを聞きながら、私はひそかにそのような煩悶はんもんをしているうちに、突如、彼は、

「うわあっ！」というすさまじい叫声を発した。

ぎよつとして、彼を見ると、彼は、

「酔つて来たあつ！」と喚^{わめ}き、さながら仁王の如く、不動の如く、眼を固くつむつてうむと唸^{うな}つて、両腕を膝^{ひざ}につっぱり、満身の力を發揮して、酔いと闘っている様子である。

酔う筈である。ほとんど彼ひとりで、すでに新しい角瓶の半分以上もやっているのだ。額には油汗がぎらぎら浮いて、それはまことに金剛あるいは阿修羅^{あしゅら}というような形容を与えるにふさわしい凄^{すさ}まじい姿であつた。私たち夫婦はそれを見て、実に不安な視線を交したが、しかし、三十秒後には、彼はけろりとなり、

「やつぱり、ウイスキーはいいな。よく酔う。奥さん、さあ酌をしてくれ。もっとこっちへ来なさいよ。俺はね、どんなに酔つても正気は失わん。きょうはお前たちのごちそうになったが、こんどは是非ともお前たちにごちそうする。俺のうちに来いよ。しかし、俺の家には何も無いぞ。鶏は、養つてあるが、あれは絶対につぶすわけにいかん。ただの鶏じゃないのだ。シャモと言つてな、喧嘩をさせる鶏だ。ことしの十一月に、シャモの大試合があつて、その試合に全部出場させるつもりで、ただいま訓練中なんだが、ぶざまな負けかたをしたやつだけをひねりつぶして食うつもりだ。だから、十

一月まで待つんだね。まあ、大根の二、三本くらいはあげますよ」だんだん話が小さくなって来た。「酒も無い、何も無い。だから、こうして飲みに来たんだ。鴨一羽、そのうち、とったら進呈するがね、しかし、それには条件がある。その鴨を、俺と修治と奥さんと三人で食って、その時に修治は、ウイスキーを出して、そうして、その鴨の肉をだな、まずいなんて言ったら承知しねえぞ。こんなまずいもの、なんて言ったら承知しねえ。俺がせっかく苦心して撃ちとった鴨だ。おいしい、と言ってもらいたい。いいか約束したぞ。おいしい！ うまい！ と言うのだぞ。うわつはつはつは。奥さん、百姓というものはこういうものだ。馬鹿にされたら、もう、縄きれ一本だって、くれてやるのはいやだ。百姓とつき合うには、こつがある。いいか、奥さん。気取ってはいかん、気取っては。なあに、奥さんだって、俺のかと同じ事で、夜になれば、……」

女房は笑いながら、

「子供が奥で泣いているようですから」

と言つて逃げてしまった。

「いかん！」と彼は嘸^ど鳴^なつて、立ち上り、「お前のかかは、いかん！ 俺のかかは、あんなじゃないよ。俺が行つて、ひっぱつて来る。馬鹿にするな。俺の家庭は、いい家庭

なんだ。子供は六人あるが、夫婦円満だぞ。嘘だと思ふなら、橋のそばの鍛冶屋の三郎のところへ行つて聞いてみる。かかの部屋はどこだ。寝室を見せろ。お前たちの寝る部屋を見せろよ」

ああ、このひとたちに大事なウイスキーを飲ませるのは、つまらん事だ！

「よせ、よせ」私も立ち上つて、彼の手をとり、さすがに笑えなくなつて、「あんな女を相手にするな。久し振りじゃないか。たのしく飲もう」

彼は、どたりと腰を下し、

「お前たちは、夫婦仲が悪いな？ 俺はそうにらんだ。へんだぞ。何かある。俺は、そうにらんだ」

にらむもにらまぬも無い。その「へん」な原因は、親友の滅茶な酔い方に在るのだ。

「面白くない。ひとつ歌でもやらかそうか」

と彼が言ったので私は二重に、ほっとした。

一つには、歌に依つてこの当面の気まずさが解消されるだろうという事と、もう一つは、それは私の最後のせめてもの願いであつたのだが、とにかく私はお昼から、そろそろ日が暮れて来るまで五、六時間も、この「全く付き合ひの無かつた」親友の相手をし

て、いろいろと彼の話を聞き、そのあいだ、ほんの一瞬たりともこの親友を愛すべき奴だとも、また偉い男だとも思う事が出来ず、このままわかれては、私は永遠にこの男を恐怖と嫌悪の情だけで追憶するようになるだろうと思うと、彼のためにも私のためにもこんなつまらない事はない、一つだけでいい、何か楽しくなつかしい思い出になる言動を示してくれ、どうか、わかれ際に、かなしい声で津軽の民謡か何か歌って私を涙ぐませてくれという願望が、彼の歌をやらかそうという動議に依ってむらむらと胸中に湧き起って来たのである。

「それあ、いい。ぜひ一つ、たのむ」

それは、もはや、軽薄なる社交辞令ではなかった。私は、しんからそれ一つに期待をかけた。

しかし、その最後のものまで、むざんに裏切られた。

山川草木^{さんせん}うたたあ荒涼

十里血なまあぐさあし新戦場

しかも、後半は忘れたという。

「さ、帰るぞ、俺は。お前のかかには逃げられたし、お前のお酌では酒がまずいし、そろそろ帰るぞ」

私は引きとめなかった。

彼は立ち上って、まじめくさり、

「クラス会は、それじゃ、仕方が無い、俺が奔走してやるからな、後はよろしくたのむよ。きつと、面白いクラス会になると思うんだ。きょうは、ごちそうになったな。ウイスキーは、もらって行く」

それは、覚悟していた。私は、四分の一くらいはいつている角瓶に、彼がまだ茶吞茶碗に飲み残して在るウイスキーを、注ぎ足してやっているのと、

「おい、おい。それじゃないよ。ケチな真似をするな。新しいのがもう一本押入れの中にあるだろう」

「知っていやがる」私は戦慄し、それから、いつそ痛快になつて笑つた。あつぱれ、というより他は無い。東京にもどこにも、これほどの男はいなかった。

もうこれで、井伏さんが来ても誰が来ても、共にたのしむ事が出来なくなつた。私は

押入れから最後の一本を取り出して、彼に手渡し、よっぽどこのウイスキーの値段を知らせてやろうかと思った。それを言っても、彼は平然としているか、または、それじゃ気の毒だから要らないと言うか、ちよつと知りたいと思つたが、やめた。ひとにごちそうして、その値段を言うなど、やつぱり出来なかつた。

「煙草は？」と言つてみた。

「うむ、それも必要だ。俺は煙草のみだからな」

小学校時代の同級生とは言つても、私には、五、六人の本当の親友はあつたけれども、しかし、このひとに就いての記憶はあまり無いのだ。彼だつて、その頃の私に就いての思い出は、そのれいの喧嘩したとかいう事の他には、ほとんど無いのではあるまいか。しかも、たつぷり半日、親友交歓をしたのである。私には、強姦ごうかんという極端な言葉さえ思い浮んだ。

けれども、まだまだこれでおしまいでは無かつたのである。さらに有終の美一点が附加せられた。まことに痛快とも、小気味よしとも言わんかた無い男であつた。玄関まで彼を送って行き、いよいよわかるる時に、彼は私の耳元で烈はげしく、こう囁ささやいた。

「威張るな！」

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡いただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
